

前報、前前報とも「花だより」、とは題していましたが、季節の花を取り上げのではなく、昨今の異常な気象状況から住居のまわりで見られる自然界・・・特に樹木関係で見られる異常な生き様について当方の勝手な推論も交えて記述して来ています。何度も記述して来ているように、ここ数年、特に夏・秋の気象は異常続きで過っての春、夏、秋、冬の四季という概念は消失、中には春の後、夏、秋夏の加わった5シーズンと考えた方がよいなどと言う人さえ出てきています。最近では観察会などに出かけても「秋」の訪れが後れてきているなど感じることはしばしばであることは事実です。

前報でも、9月の1日に気象庁がこの夏の気象を総括し「異常な高温」であったとして、報道機関向けに発表した概要を紹介しておきましたが、今月さらにこの原因についての補足発表がなされていますので紹介しておきます。

1. 今年の夏の異常気象の原因・・・気象庁

令和7年夏（6～8月）の記録的な高温と7月の少雨の特徴は以下の通りです。

- ・ 日本の夏平均気温偏差は、昨年、一昨年の記録を大幅に上回り、3年連続で最も高い記録となった。
- ・ 歴代最高気温を観測し、猛暑日や40℃以上の延べ地点数の記録も更新した。
- ・ 多くの地方で過去最も早い梅雨明けとなるなど季節進行が早く、7月は北陸地方を中心に記録的な少雨となった。

これらの天候をもたらしたと考えられる要因は以下の通りです。

- ・ 太平洋熱帯域の西部で海水温が高く、アジアモンスーン域の積乱雲の活動が早くから活発だった。
 - この影響により、6月以降、上空の偏西風が平年より大幅に北を流れ、上空のチベット高気圧が日本付近に張り出した。また、フィリピン東海上の積乱雲の活動が極めて活発で、日本付近への太平洋高気圧の張り出しを強めた。
 - 日本付近は、チベット高気圧と太平洋高気圧が重なった背の高い暖かい高気圧に覆われ、下降気流が卓越して晴れて気温が上がった。

地球温暖化の影響に加え、北半球中緯度帯の海面水温がここ数年顕著に高いことも日本を含む中緯度帯の気温が高いことに寄与した可能性がある。

（ほぼ、以前に発表されていたこの夏の偏西風の北上、チベット高気圧、太平洋高気圧の日本への張り出し、地球温暖化の影響・・・特に中緯度で顕著、海水温の上昇を主原因としている。）

（参考：この夏の異常な高温現象の原因としては・・・地球温暖化要因、日本近海の海水温の上昇、偏西風が北に押し上げられ、チベット高気圧の東への張り出し、太平洋高気圧の西及び北方への張り出しが挙げられています。・・・これ等の要因による気温の上昇は予想されてはいましたが・・・。今年の夏季の地域気温の平年差の図は気象庁のホームページに掲載されていますので参照下さい。

2. 神戸・大阪・京都の7月～9月の気温と降水量

猛暑日、熱帯夜、はては「熱中症アラート」などと日常生活や野外活動を生じたこの3ヶ月間の3地域の日最高気温平均値、日最低気温平均値、日平均気温を気温と平年との差を纏めておきました。単位は℃です。また、この3ヶ月間の各月の降水量についても平年値と並べておきました。

2025年7月～9月の気温・平年との比較：℃

地 域	7月		8月		9月	
	日最高気温		日最低気温		日平均気温	
	平年	2025年	平年	2025年	平年	2025年
大 阪	29.5	32.3	21.9	25.0	25.2	28.1
京 都	29.2	32.2	20.7	24.1	24.4	27.6
神 戸	28.8	30.9	22.6	25.2	25.4	27.7

2025年7月～9月の降水量・平年値との比較：mm

地 域	7月		8月		9月	
	平年	2025年	平年	2025年	平年	2025年
大 阪	174	102	113	55	152	158
京 都	224	181	154	306	179	91
神 戸	189	161	103	63	157	142

＊7月、8月に関してしは前報では平年値の差異を記述しましたが、9月についても日平均気温で大阪で2.9℃、京都で3.2℃、神戸で2.3℃で高かったことが分かります。因みに昨年度は、日平均気温は平年値に比べ、大阪で3.4℃、京都で4.2℃、神戸では3.2℃高めであったので、昨年と比べれば若干は低かったことになります。

＊降水量は全体的には少雨でしたが、8月京都は平年の2倍でした。内陸部であり雷雨の頻度が多かった為であろうと思われます。逆に大阪湾に面した大阪、神戸はこの影響が少なく少雨が記録されています。

＊10月以降、今年の秋・初冬の気象はどうなるでしょうか。気象庁は以下の通りの気象予報を出していますので転記しておきます。

3. 近畿地域の向こう3ヶ月間(10月～12月)の天気予報

気象庁：9月21日発表

＊北半球日本付近の概況

期の後半太平洋赤道域の対流活動の分布により、上空を吹く強い西寄りの風、偏西風は日本付近で平年よりも南を流れやすくなるとみられます。冷たい冬の空気を持ったシベリア高気圧は南東側への張り出しがやや強まり、アリューシャン低気圧は日本に近い西側で強まる予想です。

・冬の半ば以降はラニーニャ現象に近い状態が解消され、偏西風は平年の位置に戻る予想となっています。12月は冬型の気圧配置が強まるタイミングがあり、冬の訪れは順調です。12月～2月の3か月を通していても、気温は平年並みで冬らしい寒さになる見込みです

・冬型の気圧配置になりやすいため、日本海側で降水量が多く、太平洋側で少ない傾向が顕著になるとみられます。

・3か月の降雪量は北日本の日本海側と北陸で平年並み、近畿日本海側と山陰では平年並みか平年よりも多い予想です。12月に寒気が流れ込みやすいことから、早いタイミングで積雪が増える可能性があります。雪への支度は早めに済ませておくとも良いかもしれません。

***向こう3か月の天候の見通し**

全国（10月～12月）

予報のポイント

- ・ 期間の前半を中心に、暖かい空気に覆われやすい時期があるため、向こう3か月の気温は、東日本と沖縄・奄美で高く、北・西日本で平年並か高いでしょう。
- ・ 低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう3か月の降水量は、北日本太平洋側と西日本日本海側で平年並か多いでしょう。
- ・ 期間の後半を中心に、冬型の気圧配置が強まる時期があるため、向こう3か月の降水量は、北東日本・日本海側で多いでしょう。

◎近畿の各月の予報

10月：近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少なくでしょう。平年と同様、天気は数日の周期で変わるでしょう。

平均気温：低 10 並 30 高 60% 高い見込み 降水量：少 20、並み 40 多い 40% 平年並みか多い

11月：近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

平均気温：低 20 並 40 高 40% 高い見込み 降水量：少 30、並 30、多 40% 平年並みか多い見込み

12月：近畿太平洋側では、低気圧の影響を受けにくいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

平均気温：低 40 並 40 高 20% 低い見込み 降水量：少 40、並 40、多 20% 少ない見込み

＊この秋？以降についても以上のように予報されており、10月も少なくとも前半は平年より気温の高い日が続くように思われます。ただ、日長だけは気温とは関係なく、秋分も過ぎて日の出はわかりませんが、日暮れは可なり早くなってきたと感じています。

最近気象庁の発表する3ヶ月予報などは、観測衛星やコンピューターなどの進化で可なり精度が上がって来ているように感じています。この夏7～9月の気象予報、幸い西日本には脅威とはならなかった台風進路予報、九州や東北などで生じた線状降水帯の発生予報等は正確であったと思います。10月の残暑、12月の冬将軍の訪れを念頭に野外活動等参考にして行ければと思っています。

4. この夏の酷暑と残暑で樹木をはじめ植物等に生じた異変？—2

4-1. 彼岸花の開花

付近でも、秋の草花としてアレチノヌスビトハギをはじめヒヨドリバナなどの草本の開花は例年通りにみられましたが、これ等の開花は気温に関係なく、日長（正確には夜の暗期時間）に依存しているので今年も同時期の開花と思われます。でも、野外に出て本格的な「秋」を感じさせられるのは何と言ってもヒガンバナの開花でしょう。彼岸花はその名の通り9月20日頃に花を咲かせる植物でした。過っては、ヒガンバナも気象庁の「生物季節観測」に取り上げられていたのですが、2021年以降は観測対象から外されてしまいました。よって、例年との比較はできませんが・・・遅くなってきたと感じます。

一般の秋の草本の開花は菊で代表されるように葉による「日長」に依存しますが、開花時に葉を持た

ないヒガンバナの開花条件は何なのでしょう？

それは気温であると言われており、一般に日最低気温が 20 度前後まで下がってくると、地中の球根から花茎が 30cm～50cm まで一気に伸び花を咲かせると言われています。正確には地中の球根から花茎をのぼすのですので「地温」といった方がよいでしょう。

今年も 9 月 23 日、武田尾での観察会では開花をみましたが・・・この付近の裸地では 10 月 1 日現在右の画像の通りで開花には至っていません。最近では地球温暖化の影響で 10 月頃に咲くことも多くなってきているようです。



4-2. アカメガシワの発芽と拡大

前報で、この夏の住居付近での特異な現象としては、極めて限られた範囲内(ほぼ 50 m 以内)でのアカメガシワの芽生えが急増するとともに 1～2 m に成長した若木をよく見かけると記述致しました。

本件に関しては、当方の住居付近だけでなく、日常の散策路内でも公園や側溝沿い数か所で密度の濃い芽生えや若木が見られました。また、観察会などに参加した武田尾や甲山森林公園等でも陽の当たる裸地での幼木が多く見られました。また、先日の大和郡山の歴史散策でも多くの幼木がみられました。

また、科員の方からも坂道の側溝沿いに点々と芽生えが見られたとの情報をお聞きいたしました。やはり昨年、今年の猛暑が埋蔵種子の発芽条件・・・35℃以上・数時間をクリアーし、発芽・成長したと考えられます。



なお、ご存じのこととは思いますが、アカメガシワの若木の成長は早く、2 年では 2 m を超えるほどになります。また、幹を切っても枯れることはなく、すぐに側芽が展開してきます。上の画像は住宅の石垣近くの側溝に生え、1.5 m ほどに成長した茎が切り取られ半月ほど経った後の姿です。すぐに側枝が展開して来ていることがわかったと思います。

4-3. ナンキンハゼの発芽と拡大。

ナンキンハゼなどよくご存じで今更解説するまでもないでしょうが、元々はハゼの代わりとして盧をとる目的で中国から移入された落葉高木であり名は南京・ハゼに由来する。乾燥に強く、剪定にもよく耐え、紅葉が美しいことなど



から公園や街路樹などによく植栽されています。紅葉は確かに美しいのですが、一方では外来種であるため天敵は知られておらず、以前から、奈良公園などではシカが食べないことで拡大し、問題視されてきていましたし、また箕面公園のオケ原林道などでも従来の生態系を変えるほどに拡大して来ている状況が続いて来ている。

本論とは少しそれますが、今回この種に着眼したのは、前報の「雌雄異塾」に関連して、開花の状況を見て観ようと思ったからです。図鑑などでは、本種については以下の記載があります。「6～7月頃に枝先に長い穂状の花序が形成される。雌花は根元付近に少数付き、残りは雄花である。秋に果皮が割れると中から白い粉に包まれた種子が出てくる。この白い粉はロウであり、冬でも枝先に付いていることが多い。この種子からロウを採取したが、融点が低いので

夏の蝋燭には使いにくい難点があり実用化には至らなかった。」

住居の近く北側、阪急神戸線の山側には前頁の画像のように芦屋市東部を南北につなぐ幹線道路があり、この道路の両脇には500mほどに渡ってナンキンハゼが街路樹と

して植えられています。樹高10mほど、幹も40cmを超えるものもあり、この町が開発された6～70年前に植栽と思われます。

*今回この「ナンキンハゼ」を取り上げたのは、前報で記述した「雌雄異塾」の代表種であろうと考えたからです。本種については文献によって「雌性先塾」と「雄性先塾」とする両者があったので調べて観ようとおもったからです。

まず、右上の写真の花序を見て頂きたい。花序の上方は雄花が満開となった時点のものです。花序の下方に2本の短い枝状の突起が見られますが・・・先の雄花がかかる所に伸長して下の様な雌花花序となります。これだと明らかに「雄性先塾」であるといえるのですが……。実はこれは少数派のようであり、同じ花期の中で、左上のような花序も結構多い事がわかりました。この花序の下部、雌花は完全に開花状態にありこちらは「雌性先塾」型の開花です。結論は、「雄性先塾」「雌性先塾」の両者があり、樹ごとに異なることがわかりました。

この件に関しては、紹介している「植物形態学」・福岡教育大のテキスト中にも両者があり、樹ごとに異なると記載されています。以上は本来先報の「雌雄異塾」の項で書くべきでしたが紙面の関係上本報での記述といたしました。本題ではありませんがご容赦下さい。

*以下が本題です。先報で記述した、アカメガシワの発芽と幼木の増加を見て歩いている内に、ナンキンハゼも所かまわず芽生えや幼木が異常に増加して来ているのに気付きました。こちらはアカメガシワと



は異なり局部的に見られるのではなく、この付近一帯の広範囲で見られます。ナンキンハゼの実（種子）はカラスやヒヨドリなど野鳥に食され、糞と共に散布されることはご承知の通りです。よって、アカメガシワのように、局所的な芽生えや幼木の発生ではなく地勢などには関係なくあちこちで広く見られます。2，3事例を挙げておきます。



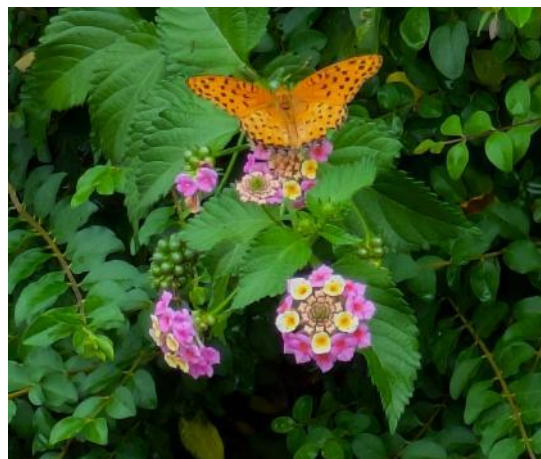
上の左は石垣からの芽生え、中央は空き家となっている庭先からの芽生え、ここでは10本ほどがかたまって実生状態でした。上右は気がつけば・・・で当マンションのマルバシャリンバイの垣根に進入生育した個体で、2，3年経過した樹と思われます。下の画像は民家の庭で発芽、成長した1，2年生のナンキンハゼ数本です。

前述のように、付近には多分100本は超える並木があるので種子は豊富、これまでも鳥散布はされていたのでしょうが実生をみることはありませんでした。今年はなぜこれほど実生が多いのでしょうか？

その理由は恐らくアカメガシワ同様に実生に必要な気象条件、異常な酷暑のあらわれた23年以降の気温に関係しているように思われます。また、この現象はこの付近だけの特異現象ではなく、野外は勿論、街中のあちこちの空き地や住宅地などでも見かけます。皆様の周囲では如何でしょうか。

5. 熱帯・亜熱帯から移入された植物の移出と拡大。

本件については、昨年度の花だより及び先の花だより12でも簡単にふれた。花の少ない夏季に花を展開するランタナをはじめアメリカノウゼンカズラやノアサガオなど本来は園芸用に移入された種が移出し拡散した種の開花は目を引く。この付近では、もともと目に付くのは「ランタナ」であり、春先には駆除されたかに見えたが、このところその勢いはすさまじい。外来種には珍しく訪蝶も多い。

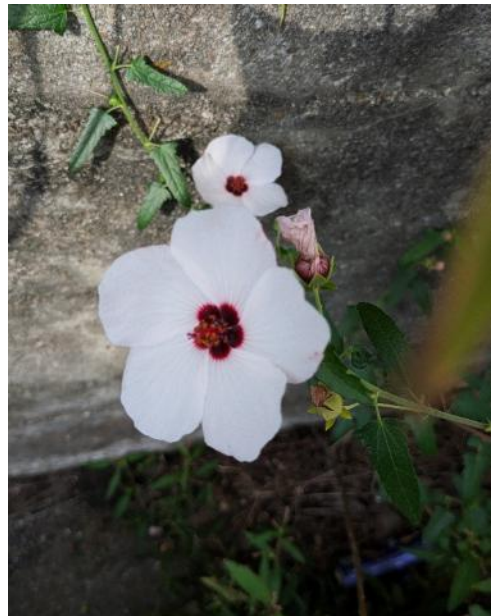


・次いで、拡大が目につくのが「ノアサガオ」である。昨年、に樹木に取り付いて、10mほどもツルを伸ばし、花をつける例を示しましたが、今年はさらに下の画像のように路地を埋め尽くし柵を上る姿が見受けられました。日本古来の朝顔は、短日性植物であり6月の夏至を過ぎないと蕾を作らず、さらに蕾も葉腋に1個しかつきません。一方ノアサガオは気候さえ良ければ冬季でも開花、しかも下の写真のように、葉腋に3～5個の蕾を持つ（花をつける）。花も大型で美しいので駆除されることもなさそうです。ただ、この拡大は今のところ私の住居地域のみのように思われますが如何でしょうか



これまで、触れてこなかったがもう1種最近野生化と見られる種があります。あるいは昨年紹介したかも知れないが、タカサゴフヨウです。当マンションの近くの側溝に1本生えていますが・・・他に2ヶ所ほどで、5、6本道路脇にかたまって姿が見られます。

＊タカサゴフヨウ（高砂芙蓉）は、ブラジル、ボリビア、アルゼンチンなど南米原産のアオイ科ヤノネボンテンカ属の草本性低木です。アオイ科の仲間としては比較的小輪の花ですが、花の中心が黒紫色で案外目立ちます。丈夫で、耐寒性もあり、こぼれダネで増えるのか、半ば野生化していて、土手の上など思わぬところで見かけたりすることがあるとのこと。少し困ると言えば、繁殖力が強いので増えすぎることだと記述されています。なおヤノネボンテンという別名は、葉がヤジリのような形をしていることから付けられたようです。タカサゴ（高砂）の由来は分からないとのこと。



本種はアオイ科の仲間なので、一日花ですが次々に花をつけ美しいので、駆除されることもなく原産が南米の熱帯域ですので、昨今の夏季の酷暑にも元気に開花を続けているのでしょう。こちらは今のところはノアサガオのように、ツルで覆うこともなく既存の生態系への影響はないものと思われます。写真のように花はなかなか美しいので目を楽しませてくれる存在ですが・・・。

6. 季節の花？

秋の七種については自然大学に入ってすぐ「お好きな服は」と覚えると教えられた記憶がある。もともと、秋の七草については万葉の歌人である山上憶良が二首の歌を詠んだことがきっかけで、日本の秋を代表する花として知られるようになったことはご存じのとおりである。蛇足ながら二首とは・・・

「秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花」

「萩の花、尾花 葛花 なでしこの花 女郎花 また藤袴 朝貌の花」の2首である。

しかし、現在では野山に出かけても冒頭の3種はともかく後の4種の自生は殆ど見かけられない。この付近でも同様、ヤマハギ、ススキ、クズの3種があるが、ヤマハギは6月に一度目の開花、9月中旬の2度咲きとなっている。ススキは穂を出してはいるが開花には至っていない。クズだけは町中でもあちこちで見かけられる。この頃町中で今見かけられる花といえば前出の外来種以外では咲き後れのサルスベリやムクゲ程度。目立って来ているのがフヨウのなかまである。フヨウについては解説フヨウであろうが、一日花、左は午後になるとピンクを帯び、夕方しぼむころにはピンクに変じる。このことから酔芙蓉の名が与えられている。

右は普通のフヨウで、もちろん色変わりなどはない。



7. ドングリの仲間。

多分以前にも記述したと思うが、自宅から 5, 6 分のところに芦屋市の「中の池緑地公園」があり、ここには 60 種近くの樹木が植栽されており、近くの芦屋市有の空き地・自然林と共に身近な観察スポットとしている。

また、緑地公園にはブナ科ではアラカシやシラカシの他にマテバシイ、コナラ、アベマキ、クヌギ、スダジイがある。この内、アベマキとスダジイはそれぞれ 10 本近くあり、品種レベルでは異なっているようで、果実の成熟時期もことなっている。特にスダジイなどは樹によって成熟の時期が 1 ヶ月ほども異なるほどである。右のスダジイは毎年最も早く成熟する品種で今年は昨年に比べ 5 日ほど遅い落果であった。

ただ、昨年は樹上の着果は多かったが降水量の関係か殆ど殻斗ごと落下し、果実は殆どシイナであった。今年は昨年の裏年に当たるのか、例年よりは落果は少ないように思われる。

また、アベマキは早い年では 8 月末から落果が見られるが今年は 9 月中旬以降とかなり遅くなったと思われる。こちらも品種が異なるのか樹によってドングリの大きさが異なる。右は大粒のドングリ（堅果）を落とす樹のもの。なお、右の画像で左側はアベマキであり、右側 3 個は落下時期が 9 月下旬からのクヌギの堅果。それぞれ殻斗もつけておきました。

クヌギとアベマキ堅果での区別付くでしょうか？アベマキは胴が太く先がやや平坦、中には中心部がくぼむものが多く、クヌギは砲弾型出先が尖るものが多いのですが・・・実際には区別のつけにくいケースもあります。それぞれ、殻斗も附しておきましたがこちらの方は区別し易いとおもいます。

なお、私自身は堅果より殻斗集めをしています。殻斗は下の画像のように加工出来、堅果のように変色したり割れたりしないので工作材料向きです。

なお、堅果の方も晩秋のドングリ駒用などに保存しますが、保存法は表面を消毒し、ビニル袋に入れてそのまま冷蔵庫の「野菜室」に保管しています。表面の色や内部もそのまま、6 ヶ月後に発芽も実証しています。上述のシイの実も同様、変色することなく（黒色のまま）冬を越します。ご参考までに。

以上

